

巻頭言 「回転ドアの思い出」

宇野 元

好奇心一杯の若者がアメリカを旅した、その回想からまた記しましょう。羽田から出発し、最初はカナダに。見事に管理された自然の美しさに感動しました。夏休みの大学キャンパスで開催された教会会議、ナイアガラの滝近郊での研修会に参加したあと、アメリカ人の神学生たちと車でアメリカに。国境をこえるや、カナダとは対照的な、雑木林の荒れた様子に驚きました。ペンシルベニア州に滞在ののち、フィアデルフィアから電車でニューヨークへ。このとき窓から見た光景も印象的でした。世界の大都市が現れるにつれて、赤茶色の山の横をゆくようでした。索漠とした風景。荒廃した都心。ニューヨークでは、一週間、ブロンクスにある家庭に泊まらせてもらいました。子どもたちと歩いていたら、鉄条網を張りめぐらした教会がありました。

炎暑の午後のこと。おのぼりの青年は、通りの向こう側に、あのティファニーを目にすると、そちらに吸い寄せられるように歩いてゆきました。そして、そっと回転ドアを押したところ、つづいて入ろうとした人の勢いで腕がはさまれてしまいます。咄嗟のことに、声をあげることもできません。すぐ白衣の人がやってきて、椅子を置いて座らせてくれました。幸い、しばらくしたら回復し、青年は恥ずかしさに目を伏せ、実際とは異なるまばらな人影のあいだを外へ急ぎました。そんなわけで、私の記憶のなかのティファニーは、薄暗がりのなかで、ショーケースに並ぶ宝石がしらじらと光を放っています。

「天国への入場は、回転ドアをとおるようです。一人一人、入るようにと招かれています。」むかし説教で聞いた言葉を、なにかの折に、あの体験とともに心のうちで思いめぐらします。たしかに、私たちは一人一人、そうして一人ずつ、しっかりドアを押して、宝石店ならぬ、色とりどりに輝く都に入るよう招かれている。そうやって入ることがゆるされている。雑踏のなかで孤独。楽しい交わりのなかでも一人。そんな私たち人間は、ひとつの秘密を抱えている存在であるといえるでしょう。すなわち、孤独な存在である私たちは、神と共にあるよう招かれている。私たちが孤独であるのは、神と共にあるためである。一人一人、自覚をもって、神の招きに応えるためである。